

## 6次産業化で農業経営に新たな取り組みを!

6次産業化初心者講座受講生(倉敷・井笠地域)

農家が、自ら生産した農産物を使って加工品を作り、販売まで行い所得向上につなげる活動を「6次産業化」といいます。この取り組みに関心ある農家を対象に「平成30年度6次産業化初心者講座」を3回シリーズで開催しました。受講生は13人です。

主な内容は、食品製造時の衛生管理や適正な食品表示の方法についての講義のほか、ジャムや食品乾燥等の加工実習です。

受講生は、講座を通じて6次産業化についての理解を深めつつあり、普及指導センターでは、今後も実践に向けた知識・技術の習得を支援します。



桃ジャムの加工実習

## 法人化など経営改善を考えている方へ ～専門家による無料相談事業が始まりました～

認定農業者等(倉敷・井笠地域)

平成30年4月岡山県農業経営相談所(以下 相談所)が開設されました。

これにより相談所が、法人化など様々な経営相談について中小企業診断士や税理士などの複数の専門家を派遣することができます。普及指導センターが、相談所への紹介窓口となっています。農業での相談経験がある専門家が派遣されるため、事例を基にした助言が得られ、相談した農家からは好評です。



専門家らと話す相談者

## 目指せ農業!倉敷地域で新規参入者急増中

新規参入希望者(管内全域)

倉敷地域では、ここ数年、就農を目指す新規参入希望者が急増しており、県の研修制度を活用しながら、現在、21人が親方農家の元で、栽培管理技術の習得や研修ほ場での栽培実習、普及指導センター主催の合同研修会への参加などを通じて、一人前の農家となるための実務研修を行っています。

これらの研修を経て、平成30年度には8人、平成31年度には12人の研修生が就農する予定です。



ももの合同研修会(袋掛け)



ももの合同研修会(秋季せん定)

## 白い牛舎でモウ暑を乗り切る(暑熱ストレス低減酪農支援事業)

備南酪農組合(倉敷市、総社市)

倉敷市の酪農家では、平成30年度暑熱ストレス低減酪農支援事業を活用して屋根に白い断熱塗料を塗布しました。

屋根裏の温度は、散布前までは5～6月の日中で38℃まで上がりました。散布後、7月～8月は猛暑だったにもかかわらず、38℃以下になりました。一方、塗料を塗ってない堆肥舎の屋根裏は50℃以上に達していました。

この夏はひどい熱中症になる牛もおらず、何とか乗り切れたとのことです。

今後、夏はさらに暑くなることが予想されます。来年の夏に向けて、今から対策を立てることをおすすめします。



左:断熱塗料を塗布した白い屋根

# 西日本豪雨について

## 被災された皆様にお見舞い申し上げます

倉敷地域では、7月豪雨による堤防の決壊などにより、これまでに経験したことのない大規模な災害が発生しました。一般家屋への被害は甚大であり、また、農地及び農業関連施設や機械にも広範に被害が生じています。被害に遭われた皆様には謹んでお見舞いを申し上げます。

普及指導センターでは発災からこれまで、市町、関係団体等と連携・協力しながら、被害状況の把握と早期の営農再開に向けた支援などに全力を挙げています。

引き続き、被災生産者の経営再建に向けて、経営・栽培技術の指導などを行ってまいります。



被災農家への対応状況

## 豪雨災害からの復活!～水田営農再開に向けて～

倉敷市と総社市では、多くの水田が冠水被害に遭いました。移植直後の水稻は枯死し、かろうじて水稻が生き残った水田も、その後の栽培管理は困難で、実りの秋を諦めざるをえなかった生産者が多くおられました。そのような状況ではありましたが、何とか準備を整え、収穫できた水稻もありました。普及指導センターでは、土壌診断や発芽試験等を実施し、冠水被害の影響を調査してきました。今後も水田営農再開に向けた支援を継続していきます。



冠水被害直後の水田(倉敷市真備町)



収穫を迎えた被災水稻(総社市下原)

# 西日本豪雨について

## 再建へ向けての相談受けています

普及指導センターでは、平成30年7月豪雨で農業関連施設や機械が水没し、経営再建に悩んでいる農業者の相談にも対応しています。国の復旧事業（被災農業者向け経営体育成支援事業）を活用して再建を進めても不足する運転資金や再建後の経営確立について、融資機関等と協力して復興を支援しています。

普及指導センターでは、今後も引き続き農業経営再建のための融資相談や栽培技術の相談を承ります。



被災したビニルハウス



融資機関を交えた営農相談

## 野菜は早期に生産を再開!ぶどうは来作に向けて回復中!!

吉備路夏秋ナス生産出荷組合では、なすの頂上付近まで冠水したほ場もありましたが、早期の排水対策、被害果及び被害葉の除去、病害対策の徹底など技術的な支援を行った結果、7月下旬には出荷が再開されました。

倉敷市、総社市の果樹産地では、ハウスの流出や棚の倒壊、土砂の流入、樹の流出などの被害が発生しました。町の3割が浸かった真備町では、収穫間際の「ピオーネ」などのぶどうが冠水し、出荷を断念せざるをえなくなりました。普及指導センターでは、堆積土砂の撤去や病害対策、枝管理、被覆除去等の事後対策を指導し、7月中旬には枝が再び伸長し始めました。樹勢は回復しつつありますが、来年作への影響について、引き続き観察しながら必要な支援を行うこととしています。



草勢が回復し、出荷中のなす



葉数が回復したぶどう園(10/1)